

炉辺の枕(10)

『科学する心／池澤夏樹』

科学的なモノの見方

美賀多台 つだわたる

専門書ではない、ちょっと自然科学好きな一般的な人を対象にした科学的読み物は継続的に読み続けています。思い起こせば小学生の時に色々な科学実験の用具などの付録のついた雑誌を定期購読したのが始まりです。

中学生時代は中断しますが、高専に入ってSFを読みだすのにあわせて、講談社のブルーバックスやみすず科学ライブラリー等を読みました。

学校の理科は物理と化学だけでしたから、傾向としては生物学系の本を多く読んでいました。『動物行動学入門 ソロモンの指輪／コンラート・ローレンツ／日高敏隆訳』を読んで大変感動したことを憶えています。そして『不思議の国のトムキンス／ジョージ・ガモフ／伏見康治訳』に出会い、生命や宇宙までテーマを広げた『ガモフ全集』を読破しようと試みました。

学校の先生に促されて読んだ『成長の限界／ローマ・クラブ』は、科学技術と社会、経済を関連して考えるきっかけになりました。その後に出された『限界を超えて』『成長の限界:人類の選択』も読みましたが、いまから思えば地球温暖化に対する批判は『人新世の資本論／斎藤幸平』と比べると緩いように思います。

ある時期から相対性理論と量子力学を理解したいと思いだしました。色々な人が書いた単行本も読みましたが、イラストや写真を多用する科学雑誌『ニュートン』も買いました。

相対性理論はなんとなく理解できたような気がしますが、量子力学はさっぱり駄目という状態で推移しています。

そして 50 代 60 代になると、池内了さんや安斎育郎さんのエッセイの傾向が強い本を読みだしました。そこでは科学的なモノの見方が書かれていました。

今回紹介する『科学する心』の著者、池澤夏樹さんは埼玉大学物理学科中退という経歴を持つ小説家、詩人であり、自然科学の解説ではなくそれを面白がっている本だと思います。



話題が広がり深まるエッセイ

雑誌に連載(2015～2018年)していたもので「毎回違うテーマを取り上げ、最後にはモザイクながら全体として一つの絵柄をめざす」という狙いを持って「科学というものの今の姿を追いながら、歴史にも目を向ける」ものでした。

全部で 12 章ありますが、タイトルを書いてみます。雰囲気は伝わるかもしれません。

『ウミウシの失敗』『日時計と幕(べき)とプランク時代』『無限と永遠』『進化と絶滅と愛惜』原

子力、あるいは事象の一回性』『体験の物理、日常の科学』『知力による制覇の得失「サピエンス全史」をめぐって』『「昆虫記」と科学の文学性』『「考える」と「思う」の違い 三本のSF映画によるAI論』『主観の反逆 あるいは我が作品の中の反科学』『パタゴニア紀行』『光の世界の動物たち 桑島からカンブリアへ』

生命、元素から宇宙まで、非常に幅広く話が展開していきます。『ウミウシの失敗』では生物学者としての昭和天皇まで出てきました。

この本を紹介したかったのは、幅広いテーマと読みやすい文章、独特の切り口に加えて、彼自身の考え方にこだわることなく、その根拠であり、さらに話題が広がるような文献や映像資料を紹介しているからです。

『日時計と霧とプランク時代』では『パワーズ・オブ・テン』という 9 分ほどの短編映画を紹介しています。

これは極大の宇宙と極小の原子の内部までを映像で見せます。

最初、湖の畔で寝転ぶ一組の男女を真上から取る映像があり、カメラはどんどん引いていき、ミシガン湖畔、米国、地球、太陽系、銀河系、島宇宙が見えて、何もなくなる 10 の 24 乗まで行きま

そして今度はどんどん接近して、最初の映像に戻り、さらに皮膚の中に映像は入っていきます。細胞がありDNAそして原子、電子雲、原子核とその内部まで 10 の⁻¹⁶ 乗までで「この先はまだわからない」で終わります。

インターネットで見ることが出来ます。とても面白い映像です。

『光の世界の動物たち』では『眼の誕生／アンドリュー・パーカー』を紹介しています。この本は「カンブリア爆発」と呼ばれる多種多様な生物が爆発的に誕生したのは、生物が眼を持ったためだと、検証しています。

『理不尽な進化／吉川浩満』『進化とは何かードーキンス博士の特別講義／リチャード・ドーキンス』も併せて読むと、進化論の真髓が分かるように思いました。

『「考える」と「思う」の違い』では『ブレードランナー』『ターミネーター』『2001年宇宙の旅』という 3 本の映画を並べて、AIは「考える」ことは出来るが「思う」は出来ないとまとめています。

数式などほとんどなく、自然科学の考え方がよくわかるように書いた本です。私は池澤夏樹さんの小説は読んでいませんが、一度読んでみようと思いました。